『哲学探究』とアウグスティヌスの知

槇野　沙央理

1.　はじめに

後期ウィトゲンシュタインの代表的な遺稿である『哲学探究』（以下、『探究』と呼ぶ）は、アウグスティヌスの『告白』からの引用で始まっている[1]。

> アウグスティヌス『告白』第 1 巻、第 8 章。「大人たちが、ある対象を名前で呼んで、そちらのほうに向いたとき、私はそれに気づき、大人たちが発した音声を通じてその対象が表されたことを理解した。というのも、大人たちがその対象を指示しようとしていたのだから。以上のことを私は、彼らの身ぶり、つまりあらゆる民族の自然な言語である身振りから引き出したのである。精神がなにかを欲したり、捕らえたり、拒んだり、避けたりするとき、その精神の感覚を、表情や目の動き、手足の動きや声の響きによってしめす言葉が、身ぶりなのだ。こうして私は、いくつかの語が、いろんな文章の、特定の箇所で何度も繰り返し発音されているのを耳にして、それらの語がどういう物を表しているのか、しだいに理解するようになった。そして私の口がそれらの記号になじんでからは、記号を通じて、私の望みを表現するようになったのである。」（PU §1. ドット圏点による強調は原文、以下同様。）

この引用箇所でアウグスティヌスは、幼少時の言語習得のプロセスを、回想という形で述べている。ここで述べられていることは、しばしばアウグスティヌス的言語観と呼ばれる。『探究』ではこの引用以降、アウグスティヌスのアイディアを材料にした吟味が開始されることから、アウグスティヌスからの引用は、考察のきっかけを作るためのものであったと考えられる。

それでは、ウィトゲンシュタインはどのように、アウグスティヌスの言葉を取り

[1] 同様に、中期から後期の時期にかけてウィトゲンシュタインが助手にディクテーションで書きとらせた『茶色本』というノートも、アウグスティヌスへの言及で始まっている。

扱ったのだろうか。これまでの研究では、アウグスティヌスの言葉は、主として、言語についてのミスリードな像を含むものとして取り扱われると考えられてきた[2]。言語についてのミスリードな像とは、ベイカー&ハッカー（2009）によると、「(i) すべての語はある意味をもつ、(ii) この意味はその語に結びつけられる、(iii) その語の意味はそれが表す対象である」（Baker & Hacker 2009, p. 2）の三つ[3]であるという。こうした像は、ウィトゲンシュタイン研究者のあいだでアウグスティヌス的像と呼ばれ、攻撃され退けられるべきものとみなされている。例えばベイカー&ハッカー（2009）によると、アウグスティヌス的像は、そこから「言語や意味についての幅広い誤解が流れ出てくる」（ibid., p. 1）ものであるという。マッギン（2013）も、アウグスティヌス的像を、「人間の言語活動についての広い視野をなおざりにさせる」（McGinn 2013, p. 41）ものとみなし、「偽りの像（false pictures）」（ibid., p. 41）と呼ぶ。[4]

だがこうした研究者たちは、アウグスティヌスの言葉を一つの固定した見方でしか捉えておらず、結果的に『探究』の思考システムを矮小化して伝えてしまっている。確かにウィトゲンシュタインは、アウグスティヌスが語ることのうちにミスリードな像が含まれているのではないか、ということを示唆している（cf. PU §1）。しかしながら、ミスリードな像を含むものとしてアウグスティヌスの言葉を扱う視点は、『探究』の考察のスタート地点としてとりあえず設けられたものに過ぎない。さらに、ミスリードな像は、ただ単に攻撃され退けられるものではなく、言語のありようを考察するために有益なものとして作り変えられる。このようにアウグスティヌスの言葉に対する取り扱いをとらえ直せば、『探究』の思考システムは、ただ単にアウグスティヌスのアイディアを攻撃するものではなく、その問題点も確認しておきながら、そのアイディアの潜在的な力を引き出して言語のありようを考察する、柔軟な思考システムで

---

[2] 例外として、ゴールドファルブ（1983）は、アウグスティヌスが述べていることは、われわれの偏見のない理解からすれば問題含みではないが、ある哲学的で奇妙な見方をした時だけ、それがあたかもミスリードな像を含むものであるかのように見えるのだと主張する（cf. Goldfarb 1983, p. 268）。

[3] この三つの像の他にも、ベイカー&ハッカー（2009）は、次の三つを追加で挙げている。その三つとは、「(iv)「これは…」という説明形式すなわち直示的説明は、言語の基礎を構成する」、「(v) 子どもは、両親から母語を学ぶ以前に考えることができる、すなわち（あたかも、思考の言語の中で）自身に話しかけることができる」、「(vi) 文の本質的な機能は物事がいかにあるかを描写することである」（ibid., pp. 2-3）、である。

[4] シュルテ（2004）はベイカー&ハッカーやマッギンより慎重であり、アウグスティヌス的像を直ちに「ターゲット」や「批判の対象」（Schulte 2004, p. 22）とみなす立場に懐疑的である。しかし、シュルテの解釈は、アウグスティヌス的像の導入を「アイロニー」（ibid., p. 22）とみなすものであり、アウグスティヌス的像の取り扱いについては依然としてネガティブであるため、広い意味ではベイカー&ハッカーやマッギンと同じ系譜に属すると言える。

あることが浮き彫りにされてくる。

以下の章では、次のように考察を展開する。続く二章では、ウィトゲンシュタインがアウグスティヌスの言葉を取り扱う手始めのきっかけとして、アウグスティヌスの言葉を「意味の単語配属説」として見る視点を導入していることを検討する。次の三章では、アウグスティヌスの言葉を「意味の単語配属説」として見る視点の限界を乗り越えるために、ウィトゲンシュタインがその視点を、プリミティブ言語の導入によって作り変えていることを検討する。これらの検討を踏まえ、四章では、『探究』にとってアウグスティヌスの発言が、そこから言語のありようを考察する道具を生成するための重要な知識として扱われるものであることを考察する。

2. 意味の単語配属説の視点

ウィトゲンシュタインは、次のような視点で、アウグスティヌスの発言を眺めてみることを提案する。

> この［アウグスティヌスの］言葉において、われわれは人間の言語の本質についての特定の像を受け取っているように、私には思える。つまり、言語での単語は対象を名指しており、――文は、そうした名指しの結合である、という像である。――われわれはこの言語像の中に、どの単語も一つの意味をもつ、という考えの根を見る。その意味は語に配属されている。その意味は対象であり、語が代理をしているものなのだ。（PU §1. ［］内補足は引用者、以下同様。）

ウィトゲンシュタインが提示する視点は、アウグスティヌスの発言を、特定の言語像が描かれているものとして見るものである。すなわち、「言語での単語は対象を名指しており、――文は、そうした名指しの結合である」という言語像として、さらに、「どの単語も一つの意味をもつ」という考えの起源であるような言語像としてアウグスティヌスの発言を見る視点である。

このようにアウグスティヌスの発言を眺める視点を、ある哲学的な言語像を投影することによって、アウグスティヌスの発言の内実を明晰にしていく視点であるという意味で、治療的視点と呼ぼう。そして、この視点に含まれる哲学的な言語像を、われ

われはひとまず意味の単語配属説と呼ぼう。

ウィトゲンシュタインは、意味の単語配属説としてアウグスティヌスの発言を眺めることによって、アウグスティヌスの発言に内在的な知を十全に引き出そうとする。まずウィトゲンシュタインがあぶり出していくのは、アウグスティヌスに内在的な知の、比較的ネガティブな面である。

> 品詞の区別についてアウグスティヌスは語っていない。言葉の習得をアウグスティヌスのように記述する人は、私が思うに、まず第一に「テーブル」「椅子」「パン」などの名詞や、人の名前のことを考えているのではないか。その後でようやく、ある活動や性質を表す名前について考え、それ以外の品詞については、何か発見されるようなものだと思っているふしがある。（PU §1）

ここでは、アウグスティヌスのように言葉の習得を記述する人が、一般名詞や固有名詞を第一に念頭に置き、次に人間の活動やものの性質を表す語について考え、それ以外の品詞に関しては「何か発見されるようなもの（etwas, was sich finden wird）」と考えているのではないかということが問われている。ウィトゲンシュタインがあぶり出そうとしているのは、あらかじめ語に配属される意味が一意的に決まっていて、われわれはそれを順次見つけ出していきさえすればいい、という態度であると考えられる。

もしアウグスティヌス的な仕方で言語を把握することが、あらかじめ語に配属される意味が一意的に決まっていて、われわれはそれを順次見つけ出していきさえすればいい、という態度を取ることであるとすれば、次に必要になるものは、その意味を一意的に決める何ものかである。

> さて、次のような言語の使い方を考えてみよう。誰かに買い物に行ってもらうことにする。私はその人に、「赤いリンゴ 5 個」という記号が書かれているメモを渡す。買い物を頼まれた人が、店の人にメモを渡すと、店の人は、「リンゴ」という記号が書かれたケースを開ける。それから一覧表で「赤」という単語を探し出し、それに照らし合わせてカラーサンプルを見つけてから、基数語の列を 5 という語まで言い、――ここで私は、店の人が基数語の列を覚えているものと想定しているわけだが――、一つ語を言うごとにケースからサンプルの色をしたリンゴを 1 個取り出す。――まあ、これと似たようにして人は言葉を扱っているのであ

る。［…］（PU §1）

ここでは、「赤いリンゴ 5 個」と書かれているメモを、店の人がどのように用いるかということが想像されている。店の人は、「リンゴ」に対応するケース、「赤」に対応するカラーサンプル、「5」に対応する動作を組み合わせて、メモに書かれていることに反応する。ここでのコミュニケーションは、店の人がウィトゲンシュタインのメモに書かれた言葉を理解するために、語に対応する何らかの対応物を必ず参照することによって営まれるものである。

このコミュニケーション像は、アウグスティヌスの発言に内在的な知がもたらす、一つの帰結である。そして、このコミュニケーション像は、われわれの実際のやり取りとかけ離れているものであるように見える。確かにわれわれは、他人の発した言葉を理解するために、何らかの基準を参照することもある。例えば色彩の専門家が、専門家でない人に対して、江戸時代に流行した四十八茶百鼠の一つ一つの色の違いについて説明しようとするならば、二人の間には色見本があったほうがコミュニケーションはうまくいくだろう。しかし、われわれは色について話す全ての場合に色見本を必要とするわけではない。つまり、アウグスティヌスの知では、われわれのコミュニケーションのごく一部しか説明できないのである。

> アウグスティヌスは、コミュニケーションのシステムを記述していると言えるかもしれない。ただし、私たちが言語と呼ぶものすべてが、このシステムであるわけはない。そして、人はこのことを「この描写は使えるの？ それとも使えないの？」という問いが立ち上がる非常に多くの場合に言っておかなければならない。その答えは、「使えるよ。けど、ごく狭く限られた領域でだけ。君が描写することを言い立てている全体に対してではない」というものである。（PU §3）

また、アウグスティヌスの知がもたらす好ましくない帰結はそれだけではない。

> あるテキストを考えてほしい。そのテキストでは、文字が音を標示するものとして使われ、それだけではなく、アクセントを標示するものとしても、句読点としても使われている。（人はテキストというものを、音のイメージを記述するための言語とみなすことができる。）そしてある人が、そのテキストを、どの文字にも

一つの音が対応し、文字にはそれ以外のどんな機能もないものとして理解していると考えてみてほしい。テキストをこんな風にあまりにも単純化して考えることは、アウグスティヌスの言語理解に似ている。（PU §4）

ここでは、アウグスティヌスのような言語理解が描写されている。あるテキスト、すなわち音のイメージを記述するために用いられるような言語で書かれるテキストがあり、そこで文字は様々な役割を担っている。例えば文字は、音を表すためにも、アクセントを表すためにも、また、句読点としても用いられる。ここで、このテキストを見たある人が、「そのテキストでは、どの文字にも一つの音が対応し、文字にはそれ以外のどんな機能もない」と理解する。この人は、文字の果たす役割を過度に単純化してしまっている。

このように、アウグスティヌスの発言に内在的な知が、われわれのさまざまなコミュニケーションのごく一部しか説明できず、言語を矮小化して捉えるものであるならば、われわれは、アウグスティヌスの知に対してほとんど何も積極的なものを期待できないのだろうか。

そう結論するのは性急である。ウィトゲンシュタインの最初の提案を思い出してみるならば、原因は明らかに別のところにある。ウィトゲンシュタインは、アウグスティヌスからの引用の直後に、意味の単語配属説としてアウグスティヌスの発言を眺める視点を提示した。つまり、アウグスティヌスの知からネガティブな結果が導出されるのは、意味の単語配属説を視点として採用したからである。よって、まず見直されるべきものは、意味の単語配属説としてアウグスティヌスの発言を眺める視点の方である。

ウィトゲンシュタインも、問題は「意味」という概念、すなわち意味の単語配属説の中にあると示唆する。

もし人が 1 節の［買い物の］例を眺めてみれば、どの点において言葉の意味という一般的な概念が、言語の機能をもやで包んで、クリアな視界を不可能にしているかを予感するかもしれない。［…］（PU §5）

もちろん、アウグスティヌスの発言にも、意味の単語配属説の萌芽は認められよう。意味の単語配属説は、あくまでアウグスティヌスの発言に内在的なものである。しか

し、その説を孕むものとしてしかアウグスティヌスの発言の意義を認めないことは、ただ単にレッテルを貼ることであり、根拠のないことである。もしわれわれが、アウグスティヌスの発言に潜在的な知をより良い方向へ引き出そうとするならば、その手段として利用していた意味の単語配属説という見方そのものを見直さなければならない。

3.　視点の作り変え

われわれは、どのように意味の単語配属説を見直すべきなのだろうか。実は、先の箇所には以下のような続きがあった。ウィトゲンシュタインはここで、意味の単語配属説としてアウグスティヌスの発言を眺める視点を、部分的に否定しつつも、それを全面的に退けようとはしていない。

> もし人が 1 節の［買い物の］例を眺めてみれば、どの点において言葉の意味という一般的な概念が、言語の機能をもやで包んで、クリアな視界を不可能にしているかを予感するかもしれない。——もしわれわれが、言語の現象をプリミティブな使用法を手掛かりにして調査すれば、霧が晴れて、単語の目的と機能をクリアに展望することができる。（PU §5）

ウィトゲンシュタインは、プリミティブな使用法に着目するようにわれわれを促す。プリミティブな使用法とは、『探究』2 節において展開された「プリミティブな言語」をはじめとする単純な言語モデルのことであるが、実はこのプリミティブな言語は、意味の概念と深い関わりがあるものである。

> 意味というあの哲学の概念は、言語がどのように働くのかを、プリミティブな方法で想像することに故郷がある。人は、私たちの言語よりプリミティブな言語を想像している、とも言えるだろう。
>
> アウグスティヌスが与えた記述に合致するような言語を、考えてみよう。それは、棟梁 A と見習い B のコミュニケーションに役立つ言語であるべきだ。A が石材で建物を建てる。石材は、台石、柱石、石板、梁石が手元にある。B は石材を

手渡さなければならないが、それも、A が必要とする順番でなければならない。この目的のために、二人は、「台石」「柱石」「石板」「梁石」という単語でできた言語を使う。A がある単語を叫び、――B は、その叫びに応じて持ってくるように彼が学習した石材を持っていく。――これを、完全なプリミティブ言語だと考えてもらいたい。（PU §2）

プリミティブな言語は、意味の単語配属説によって説明できる完結した言語であり、あくまでアウグスティヌスの発言に内在的なアイディアを展開した虚構の言語である。プリミティブ言語にあるのは、たった四つの、しかも名詞だけでできた語彙であり、どの語がどの石材に対応しているかは、あらかじめ決まっている。

しかし、プリミティブな言語は、ただ単に意味の単語配属説を具現化したものではない。プリミティブな言語には、建物を建てるために使われるという実用性、すなわち目的がある。「台石」という言葉は、B が石材を手渡すという具体的な行為との関連から理解される。さらに、B はこのプリミティブな言語を使えるような訓練を受けていることが前提になっている。つまり、プリミティブな言語は、実際の人間の生活においては言葉と不可分であるような主要素――目的・行為・訓練を含んでいる。プリミティブな言語は、アウグスティヌスの発言に内在的なアイディアを活かしつつも、よりわれわれの実際的な言語活動に似せて作られたものなのである。

このプリミティブな言語に導入された三つの要素、すなわち言葉の目的・言葉をもってする行為・言葉を覚える訓練に着目することは、われわれの言語に対する固定した態度を変えてくれ、想像力を与えてくれる。例えばウィトゲンシュタインは、プリミティブな言語を子どもの訓練に見立てることによって、ある言葉の意味を柔軟に捉えて見せている。

2 節の［プリミティブな］言語を実際に使うとき、一方が単語を叫び、他方がその単語に従って行動する。ところが言葉のレッスンでは、次のようなプロセスが見られるだろう。生徒が対象を名指す。つまり先生がある石を指したとき、その単語を言うのだ。――確かにこの場合、もっと簡単な練習も見られるだろう。先生が先に言った言葉を、生徒が後から口まねするのだ。――どちらも、言語に似たプロセスである。

私たちはこんな風にも考えることができる。言語 2 で単語を使うプロセス全体

は、子どもが母語を習得するときやっているゲームの、ひとつなのだ。そのようなゲームを私は「言語ゲーム」と呼ぶことにし、時にはプリミティブ言語のことも言語ゲームと呼ぶつもりだ。

［…］

言語だけでなく、言語がそこに織り込まれている諸活動もひっくるめて、その全体を私は「言語ゲーム」と呼ぶことにする。（PU §7）

ウィトゲンシュタインの見立てとは、2 節のプリミティブな言語を、教師と生徒の間で営まれる訓練として、あるいは、子どもが母語を習得するときにやっているゲームとして見る、というものである。それは例えば、生徒が対象の名前を言い当てるゲームや、先生が先に言った言葉を生徒が復唱する訓練として、プリミティブ言語を見ることである。

ここでウィトゲンシュタインが示唆しているのは、われわれには、様々な見方で言葉を眺める自由がある、ということである。われわれには、「石」という言葉を、棟梁が助手に向かって石材を持って来させる命令としても、また、教師が子どもに言葉を復唱させるためにも、――例えば、「石」と「意志」の発音の違いを教える場面でも――、用いることができる言葉として見てとる自由があるのである。

この自由は、一見すると些細なものであると思われるかもしれない。だが思い出して欲しいことは、意味の単語配属説としてアウグスティヌスの発言を眺めていた当初の段階では、アウグスティヌス的な発言をする人は、あらかじめ語に配属される意味が一意的に決まっていて、われわれはそれを順次見つけ出していきさえすればいいと考えているように思えた、ということである。ここでは、一つの語に一つの意味がすでに当てがわれていることが当然と見なされており、様々な見方で言葉を眺めるという発想はなかった。

しかし今や、かつての、あらかじめ語に配属される意味が一意的に決まっていて、われわれはそれを順次見つけ出していきさえすればいいという態度は、その都度の言葉が用いられる眼目に応じて、単語の意味を一つ一つ検討していくという態度へと変換され、われわれは、多様な言語使用のありように柔軟に対応できる自由な言語の取り扱い方法を手に入れたわけである。

これらの変化が示すことは、『探究』において、アウグスティヌスの知は否定されないということ、それどころか、その潜在的な力が引き出され、自由に言葉のありよう

を見て取るための知識として活用されるようになるということである。

4. 『探究』におけるアウグスティヌスの知

一つの知も、見立て次第で、われわれに自由な態度を許すものに映ったり、反対に、われわれの見方を束縛するものと映ったりもする。アウグスティヌスの言葉に対するこれまでの見立ては、もっぱらわれわれの見方を束縛するものであった。すなわち、これまでの研究では、アウグスティヌスの言葉は、主として、言語についてのミスリードな像を含むものであると考えられてきた。

これにより、アウグスティヌスの考えは攻撃される対象である、というレッテルが貼られ、結果的に、アウグスティヌスの知の潜在的な力が『探究』に活かされている、ということが見過ごされてきた。

確かに、アウグスティヌスの発言には、われわれが警戒すべき発想が含まれている。意味の単語配属説は、語に対して意味を機械的に割り当てていくという発想や、その割り当てはすでになされており、語に配属される意味は一意的に決まっていて、われわれはそれを順次見つけ出していきさえすれば良いという態度と非常に密接なものである。また、アウグスティヌスの発言には、語に意味を一意的に配属する基準を定めようとする動機が隠れているようにも見える。

だがこうした発想に基づく分析は、アウグスティヌスの発言に対する一つの見方に過ぎない。ウィトゲンシュタインが与えた見方は、こうしたミスリードな像に基づくものだけではなく、プリミティブな言語のように、われわれの言語に対する態度を改めさせ、自由な想像力を許してくれるようなものもある。彼は、プリミティブな言語を考案し、それをさらに訓練へと見立てることにより、単語の意味配属説のアイディアを活かして、言語のありようを自由に考察できる方法——ひとつの語に対し様々な見立てを想像する自由と、ひとつの語をひとつの見立ての中で吟味する厳密さとを兼ね備える方法を作り上げた。

今やわれわれは、アウグスティヌスの知に対するレッテルを取り去り、潜在的な力を認めることによって、それに対する敬意を払わねばならない。『探究』にとってアウグスティヌスの発言は、そこから言語のありようを考察する道具を生成するための重要な知識として扱われるものなのである。

5.　おわりに

本稿は、『探究』1 節におけるアウグスティヌスの言葉の取り扱いを再検討し、『探究』の思考システムが、アウグスティヌスの知を活用して、言語のありようを考察する自由で柔軟な視点を獲得する、生きたシステムであることを考察してきた。この考察が、これまでの研究における不当に固定的なアウグスティヌスの取り扱いに対抗するものであることは、すでに述べたとおりである。

最後に、『探究』の思考システムがわれわれ哲学を志す者にとってどのようなヒントを与えてくれるかについて述べておきたい。われわれと『探究』の関係を考える上で最も重要なことは、その関係のあり方が「こうでなければならない」という決まりはない、ということである。われわれは、ウィトゲンシュタインの発言からミスリードな概念を取り出すこともできるし、その概念を換骨奪胎して作り変えることもできる。つまり、『探究』に対するわれわれの関係は、様々な見立ての中でいろんなふうに見えてくるものである。この考えが正しければ、もっとも『探究』を活用できる者は、ウィトゲンシュタインの意志を追いかける者ではなく、『探究』で展開されたアイディアに対して、様々な見立てを試みる者であることになる。というのも、その者は、様々な見立てを試みることによって、『探究』の知と自分のアイディアとの関係を複数の視点によって捉え、『探究』の新しい使い道を見いだすことができると考えられるからである。

参考文献

Baker, G. P. and Hacker, P. M. S. (2009), *Wittgenstein: Understanding and Meaning*, 2nd, extensively rev. ed. by P. M. S. Hacker, Blackwell.

Cavell, S. (1979), “Excursus on Wittgenstein’s Vision of Language”, *The Claim of Reason: Wittgenstein, Skepticism, Morality, and Tragedy*, Oxford University Press.

——. (1995), “Notes and Afterthoughts on the Opening of Wittgenstein's Investigations”, *Philosophical Passages: Wittgenstein, Emerson, Austin, Derrida*, Blackwell Publishers.

Goldfarb, W. (1983), “I Want You to Bring Me a Slab: Remarks on the Opening Sections of

the Philosophical Investigations”, *Synthese*, 56 (3), pp. 265-82.

Luntley, M. (2015), *Wittgenstein: Opening Investigations*, Wiley Blackwell.

McGinn, M. (2013), *The Routledge Guidebook to Wittgenstein's Philosophical Investigations*, Routledge.

Ring, M. (1991), “Bring Me a Slab!: Meaning, Speakers, and Practices”, *Wittgenstein's Philosophical Investigations*, edited by Robert L. Arrington and Hans-Johann Glock, Routledge.

Schulte, J. (2004), “The Builders’ Language: the Opening Sections”, *Wittgenstein at Work: Method in the Philosophical Investigations*, edited by Erich Ammereller and Eugen Fischer, Routledge.

Stern, D. G. (2004), *Wittgenstein's Philosophical Investigations: an introduction*, Cambridge University Press.

Wittgenstein, L. (2009), *Philosophische Untersuchungen = Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker and J. Schulte, Rev. 4th ed., Blackwell, 2009（丘沢静也訳、『哲学探究』、岩波書店、2013 年。藤本隆志訳、『ウィトゲンシュタイン全集 8：哲学探究』、大修館書店、1976 年。）

（まきの・さおり　千葉大学大学院人文社会科学研究科在学）